

ひびき

盲導犬を同伴して道を歩いている人を見ると、盲導犬をパートナーに得てこの人は心の視界をどれだけ広げられたのだろうか、と思う。

今は盲導犬を喜んで受け入れてくれるホテルや、飲食店が増えている。目の不自由な人が盲導犬をお供に好きなところを旅して楽しめるようになった。その土地の風物を耳で聞き分け鼻で嗅ぎとることで心の視界はどんどん広がっていくに違いない。

ユーザーを導く仕事の中盲導犬を見ると、多くの人はユーザーよりも盲導犬に関心を向ける。

「健気ねえ」

み、あるいは語るようになっていた。フルート、バイオリン、ピアノの演奏を挿入し、スライドで絵を見ながら進めるのでかなり臨場感がある。そうして始めたところ、見せ場の場面になると、奇怪な叫び声があがった。びっくりしたが、動揺せずいつものとおりに語り続けた。「びっくりされたでしょ。実は深く感動しての職員なんです」

職員の方が僕を発声の主のところに連れて行ってくれた。一目で重度身障者とわかる若者がストレッチャーに身を横たえ僕を見上げていた。僕は両手で彼の手を握った。彼はまた叫びをあげた。

彼の感動が彼の動きの不自由な手を通して伝わり、僕の心を揺さぶった。

それからまもなく知的障害児の保育園に招かれた。読み聞かせが始まる前、先生の一人が、「うちの子どもたちに読み聞かせがどれだけ理解されるか、実は心配なんです」と、話しかけてきた。

「大丈夫です。ちゃんと伝わりますよ」

感動を分かちあえることの喜びと重み

作家・タレント 志茂田景樹

「ちゃんと青信号で渡りはじめる。お利口さんねえ」

などと、賞賛の声を惜しまない。

ほんとうは盲導犬をパートナーに得てユーザーの人がどんなに自分の人生を豊かにできたかに思いを至らせてほしいところである。僕は十数年前までは盲導犬だけに気をとられ、大変だろうなあ、ストレスも溜まるだろうなあ、その働きに感心しても、そのユーザーに思いを馳せることは少なかった。

それが変わってきたのは1999年8月に「よい子に読み聞かせ隊」を結成し、絵本の読み聞かせ活動を全国で展開し始めてのことである。幼稚園、保育園、小学校などを訪れての読み聞かせ会が多いが、そろそろ1600回に達する開催数のうち数十回は特別養護老人ホーム、介護施設、身障者施設、知的障害児施設などで行なっている。

もう10年も前のことになるが、初めて重度身障者施設を訪れた。入所者の家族の方も大勢訪れてくれた。この頃は自作の童話をよく読

僕は自分に言い聞かせるように言った。

読み聞かせは理解させるかどうかよりも伝わるかどうかだ、と数年の活動で肌で感じるようになってきた頃だった。その僕の背中を強く押しつけてくれたのは重度身障者施設で出会った感動の叫びをあげた若者だった。

読み聞かせは、読み語る側と聞く側に分かれて行う。しかし、両者の間に垣根はない。読み聞かせをしあがるという上から目線で垣根を作ってはいかない。

同じ目線で、一緒に素晴らしい世界で楽しもうよ、という気持ちが生命である。この気持ちに立ったとき、語る側と聞く側は物語世界をもとにも広げて伝えあい、感動を分かちあうことができる。

僕は最終この気持ちで読み聞かせを行なった。そして、終わってまわりついて離れない子どもたちにうれしい悲鳴をあげるはめになったのである。

伝えることの大切さをいつまでも伝えていくと思っている。

しもだ・かげき

1940年生まれ。1980年、「黄色い牙」で西木実受賞。その後、作家活動のほか、タレント活動、教育講演などで多岐に活躍。活字離れに危機感を持ち、99年に「よい子に読み聞かせ隊」を結成し、ボランティアメンバーとともに全国で活動を行っている。またホームページでも読み聞かせの絵本を公開している。現在はツイッターで人気。フォロワーは24万人を超える。ツイートる言葉「人って、みな最初は石ころだもの」(ボラブラ)

